

日本児童文学

2001

1-2

january—february

創作特集—21世紀の扉を開く—



『集後記』

○世紀が暮れていく。砂田弘前編集
「本誌前号、神宮輝夫氏との対談で
語っていた。——「本田和子さんが
「児童文学は今世紀に産出された
子ども専用のゲッターに他ならない」と
まで言い切っている。そのゲッターはい
まや解体しつつあると。反発を覚えなが
らも、私は一面真実でもあるという受け
取り方をしています。」「大人」とちがう
独自の価値をおびたものとして「子ど
も」が見出されたとき、その「子ども」
にとどけるものとして「児童文学」が生
まれた。だが、今日、その「子ども」も
「児童文学」も、はつきりした輪郭を失
いつつあるように思える。二一世紀に
「児童文学」はあるか……。それでも、
新しい世紀の扉をひらく。

な場面を想像しては、楽しんでる。
▼この号から、新編集委員会の企画・編
集になった。私をふくめて五人の編集委
員の平均年齢は、四八歳（小数点以下四
捨五入）。全員、太平洋戦争後の生まれ
だ。もう決して若くはないけれど、現代
児童文学を成立させた、大正二桁、昭和
一桁生まれよりは、だいぶ後発の、むし
ろ、草創期の現代児童文学を子ども時代
に読んだ世代である。私たちの任期は、
二年間。よろしくお願いします。
▼今号からスタートした企画は、「今こ
の人に聞きたい」と「私の児童文学創作
ノート」。まず、志茂田景樹氏、岩崎京
子氏に登場していただいた。岩崎さんの
連載は、全六回、ことしいっぱい続く。
時評も再構成して、「創作時評」、「子ど
も文化時評」の二本立て。ご愛読ください。
▼二一世紀一冊めの表紙と扉は、太田大
八画伯が描いてくださった。すでに多く
のすぐれた仕事をなさってきた絵かきさ
んなのに、少年を描いた表紙は、まった
く新しく、みずみずしい。敗戦後間もな
い一九四六年に創刊され、児童文学のさ
まざまな問題について議論してきた歴史
のある本誌も、こんなふうに新しくなる
ことができるだろうか。そして、二一世
紀の児童文学は——。

（宮川健郎）

『日本児童文学』第四七巻第一号

定価九五〇円 本体九〇五円

* 定期購読をご希望の方は、もよりの
書店または巻末綴込みの振替用紙にて
お申し込み下さい。

二〇〇一年二月一日発行 1-2月号

編集・発行

社団法人 日本児童文学者協会

発行人 古田足日

東京都新宿区神楽坂六―三八

中島ビル五〇二号

郵便番号 (一六二一〇八二五)

電話 〇三三三六八〇六九一

FAX 〇三三三六八〇六九二

e-mail: jibunkyo@cello.ocn.ne.jp

〈編集委員〉

石井直人 ときありえ

藤田のぼる 牧野節子

宮川健郎(編集長)

発売 株式会社 小峰書店

東京都新宿区市谷台町四―一

郵便番号 (一六二一〇〇六六)

電話 〇三三三五六七三二一(代)

印刷所 株式会社 三秀舎

中 由美子の本……

Fine Asian Literature

サンサン(桑桑)

そうぶんけん
曹文軒

映画「草の家」原作 2001年公開予定

「今の子どもを、きのうの子どもと、さらには、あしたの子どもと比較しても、みな同じであるというだけで、何も根本的な違いなどありえない」

永遠なるものを求めよ——私たちは自分にこう喚起すべきだ。

作家・北京大学教授 曹文軒

文化大革命直前の中国の田舎の村、少年サンサンを取り囲む世界はすべてが新鮮であった。サンサンは村の子供は違。本にはサンサンが校長の息子だからではなく、ただただサンサンがサンサンだからだ。小学校の級友たちとのあつい交わり、かいまみえる淡いおとなの世界……毎朝、黄金色の大陽が確実に昇るように、少年にはその日1日も未知のドラマが待ち受けている。

蔵書章

3月3日発売予定

本体価格 2,095円

中国



毎夜、夢の中に現れて「カバラン、カレオワン」といざなう女の正体は……少年シンクーはあるとき、自分が少数民族カバランの末裔であることを知る。彼がひそかに思いを寄せる女優の卵の級友メイランとのデートの途中、突然の雷雨にあったことから、時を超えて出自を探る愛と冒険の旅が始まる。自分は何者なのか。民族のあるべき形とは？ 現代台湾の少年文学の第一人者が放つ傑作タイム・ファンタジー！

カバランの少年 リートン 李潼

好評発売中

本体価格 1,905円

台湾

一人っ子たちのつぶやき

チェンタンイェン
陳丹燕

中国

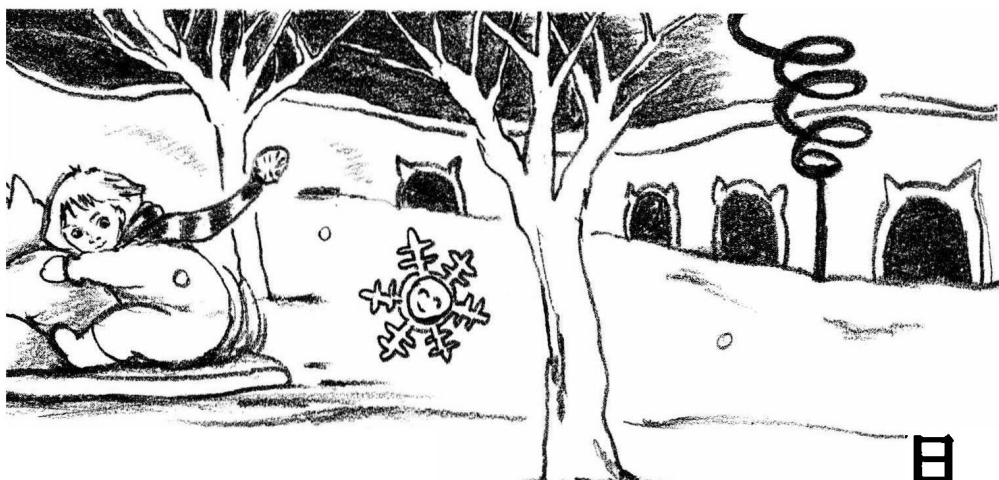
2003年に中国は一人っ子政策をやめる。孤独な小さな手が古い国を揺すぶったから？ 国家の壮大なる実験は社会に何を生起せしめたのか。本国で異例のベストセラーとなった聞き書き集。

本体価格 1,429円

てらいんく

〒220-0003 横浜市西区楠町1-3

TEL 045-410-1278 FAX 045-410-1279



日本児童文学

2001

12

もくじ

創作特集——21世紀の扉を開く——

◆短編

カイコのかい子ちゃん……………野村一秋 6

にんげんのかたちのスイッチ……………大島真寿美

16

リラとよばれた女の子……………河原潤子 24

木が木じゃない……………内田麟太郎 30

雪の贈り物……………風野 潮 38

コンクリートvoice……………長崎夏海 44

おかあさんとあたし……………花形みつる 50

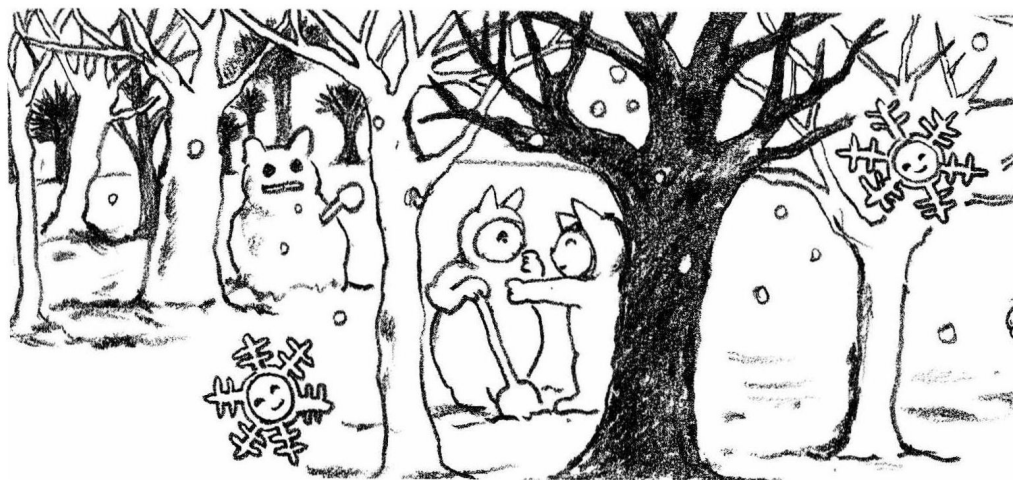
◆詩

ムシムシランドのかぶと虫……………青戸かいち 60

いのち
生命……………小泉周二 62

緑の指……………新川和江 64

猫語辞典本日発売……………高木あきこ 66



誕生……高階紀一 68
ぼく……矢崎節夫 70

《今この人に聞きたい》

——志茂田景樹さん——……牧野節子 72

●岩崎京子《私の児童文学創作ノート》 80

〔新人登場〕——安東みきえ 92

〔編集室訪問〕——岩崎書店……長野ヒデ子 94

〈創作時評〉……西山利佳 96

〈同人誌評〉……うみのしほ「中部児童文学」同人リレー

■子ども文化時評……酒井晶代 102
108

●ブックラック…… 101

●作品奨励賞選評…… 112

●子どもと本の情報館…… 114

●読者のページ…… 116

●執筆者プロフィール…… 117

●編集後記…… 118

●表紙・扉絵／太田大八 レイアウト／杉浦範茂
●カット／奈良坂智子

january-february • 2001 • 531号

日本児童文学

創作特集

21世紀の扉を開く——



カイコの
かい子ちゃん
野村 一利
田代 知子・エ

きょうで夏休みもおわり。

すっかり宿題^{しゅくだい}をかたづけたりえりちゃんが、朝から、あみちゃんのうちにあそびにきました。

「あーあ、たいくつ、たいくつ」

そういいながらへやに入ってくると、えりちゃんはあみちゃんのかたに目をとめました。

「それって、アオムシ、じゃあないよねえ」



かたにとまってるのは、白い、大きな虫です。お父さんの中指^{なみゆび}くらいはあるでしょうか。

「カ、イ、コ。わたしのペット。ガのよう虫^{むし}なんだけど、すつごくかわいいんだよ」

「ほんとだ。よく見ると、おもしろい顔。たれ目で、だんご^{だんご}っ鼻^{はな}で……」

「あのね、目に見えるのはもようで、鼻^{はな}に見えるのが頭^{あたま}な

の」

のぞきこむえりちゃんを、あみちゃんが横目^{よこめ}でにらみま
した。

「ふーん。ねえ、これ、どこで買ってきたの？」

「通販」

「は？」

「電話で注文^{ちゅうもん}して、宅急便^{たくきゅうびん}でとどくやつ」

「ああ、あのツーハンね」

ふむふむとうなずくと、えりちゃんはカイコの前でく
くると人さし指^{ゆび}をまわしました。

「あなたのお名前は？」

「かい子です」

あみちゃんがかわりにこたえました。

「なんだ、名前はつけてないのかあ」

「だから、かい子なの」

「はあ？」

「カイコのかい子ちゃん」

「ああ、そういうこと。この子、女の子だったんだ」

あみちゃんはドキッとしました。

（女と男はどこで見分けるのってきかれたらどうしよう）

えりちゃんがないかいだす前に、話をかえなくては
けません。

「さわってみる？」

「みるみる」

えりちゃんが両手^{りょうて}をかさねて、へちようだいゝをしまし
た。

そーつとえりちゃんの手ひらにのせると、かい子はも
んぐりもんぐりと二センチほどすすみました。

「この子、おしりにつがある」

「それがまた、かわいいのよね」

「なに食べるの？」

「やさいでも肉でもおかしでも、なんでも」

「じゃあ、これも？」

そういつて、えりちゃんはポケットからコーラ味^{あじ}のグミ
をだして、手にのせました。すると、かい子はグミにしが
みついてかじりだしました。

「ほんとだ。かい子ちゃんって、おもしろい」

「カイコっていうのは、ほんとクワの葉^はっぱしか食べな
いんだって。でも、かい子ちゃんはヒンシュカイリヨウで、
なんでもたべるんだって」

「そうか、ヒンシュカイリヨウなんだ」

えりちゃんはカイ子をじーつと見つめています。

ヒンシュカイリヨウがなんのことか、説明^{せつめい}するあみち
ゃんにわからないのですから、えりちゃんもわからないのか
もしれません。

「ねえねえ、この子って、スケルトンタイプじゃない？」

「えっ」

あみちゃんは、あわててえりちゃんの手の上をのぞきこみました。

たしかに、白色がうすくなっています。その下に見える黒っぽいのは、グミかもしれません。いつからそうなったのか、ぜんぜん気づきませんでした。

「にんじんを食べたら赤くなつて、レモンのかわを食べたら黄色くなつたりして。そういうのつて、おしやれだよな」

えりちゃんは自分でいつておいて、ケラケラわらつています。

「そんなにわらわなくなつたつて……」

あみちゃんが口をとがせました。

かい子もむむつと頭をおこして、えりちゃんを見上げました。

「こんやも、お父さんのいないばんごはんになりました。

きのうもその前も、お父さんの帰りはおそかつたようです。

テーブルをはさんで、あみちゃんとお母さんがむかいあいます。かい子もテーブルの上で、いっしょに食べました。「ピーマンいっぱい食べたなら、アオムシみたいになるかな」

そういうながら、あみちゃんはサラダのなかからピーマ

ンをつまみだしました。あみちゃんのきらいなピーマンでも、かい子はおいしそうに食べてくれました。

食事のあとは、テレビタイムです。

あみちゃんはテレビのまん前にじんどりました。かたには、みどり色になったかい子のをせています。

（お父さんの帰りがおそくてよかった）

まずはリモコンをテレビにむけて、にくつたらしい野球中継をふつとばしました。

テレビの時間でも、かい子のかたの上でにんじんを食べていました。カリカリカリカリと音がきこえてきます。細く切つたにんじんをかじる音です。ほんとによく食べるかい子でした。

ふと気がつくと、カリカリがきこえてきません。見れば、かい子が頭をぐーつともちあげて、テレビに見入っていました。いつも人間にくつついていると、虫もテレビがすきになるようです。

「いつまで見てるの。あしたから学校がはじまるのよ。さつさとおふろに入つてねなさい」

ばんごはんのかたづけをすませたお母さんが、リビングにあらわれました。こわい顔をして、あみちゃんを見下ろしています。

時計は、まだ九時前です。テレビはちょうどいいところです。

(きのうまでは、なんにもいわなかったのに……)

思わず声をあげたあみちゃんに、お母さんがたすけをもとめました。

「きこえてるの？ 早くねないと、朝おきられないわよ」

お母さんの声が大きくなりました。

こうなったら、あみちゃんにもいじがあります。九時ま

ではうごかないぞ、と心にきめました。

ところが、お母さんにもいじがありました。あみちゃん

にはかまわず、リモコンに手をのばしたのです。

とられてなるものかと、あみちゃんはリモコンをもつて

にげました。

すると、こんどは、テレビに手をのばしました。テレビ

のスイッチを切るつもりです。

「やめてよ、わたしが見てるんだから」

あみちゃんがそうさげぼうとしたときです。耳もとでだ

れかがつぶやきました。

——おもしろいののにのに……。

かたに目をやると、かい子が口をもごもごさせています。

(うむ、ひよつとして、いましゃべったのは——)

とつぜん、かい子がピューツと白い糸をはきだしました。

糸は細い線になって、まっすぐにのびていきます。そして、

お母さんのからだにまきつき、あつというまに、ぐるぐる

まきにしてしまいました。

「おーっ、おーっ、すごい」

「なんなの、これ。早くとつてよ」

「いいから、いいから。ちよつとのあいだ、がまんして

て」

これでゆつくりテレビが見られるのですから、たすける

わけにはいきません。

「わが子に、こんなめにあわされるなんて」

みうごきのとれないお母さんは、そのままソファにたお

れこみました。とはいっても、気ぜつしたわけではありません。

せん。いっしょにテレビを見ようというのです。

あみちゃんの後ろから、お母さんのわらい声がきこえて

きます。きゆうくつなかつこうでも、しつかりとテレビを

楽しんでいるようでした。

「おわった、おわった。さあ、おふろに入ろうつと」

あみちゃんがふりかえると、お母さんはいねむりをして

いました。からだにまきついていた糸は、いつのまにか消

えていました。

ひさしぶりの早おきでした。ねぼうどころか、お母さん

よりも早く目をさしました。ほんととは、かつてに目がさ

めてしまったのですが、それでも、あみちゃんは大いばり

です。

学校へは、かい子もいっしょにきました。家にいるのはきけんです。お母さんにおそわれるかもしれません。

教室に入って、さいしょにかい子に気づいたのは、となりのせきのだいちゃんでした。

「あーっ、あみがへんなもん、つけてきた」

その声につられて、みんながドドドッとあつまってきた。

「きゃーっ」と声をあげてにげだしたのは、まりなちゃんです。

「こんなの、チョウかガのよう虫だから、にげることないのに」

そういうあきらくんに、だいちゃんがきました。

「なんのよう虫だよ」

「だから、チョウかガの……」

虫博士のあきらくんがこまっています。こまるのも、むりはありません。朝、トマトを食べてきたかい子は、赤くなっていたのです。

そこで、あみちゃんの出番です。

「これはねえ、カイコっていうの」

「図鑑で見たのと色がちがうけど、形はそうかな。カイコは糸をだして、まゆをつくるんだ。で、そのなかでさなぎになって、ガになって、それでまた、でてくるんだ」

あきらくんが、どうだという顔をしました。

やつぱり、あきらくんは虫博士です。でも、かい子のあのひみつは、あきらくんでも知らないはずです。

体育館に一年生から六年生まで、ぜんいんがあつまりました。始業式がはじまります。あみちゃんの二年一組は、まんなかの列です。じつとしていない低学年を、高学年がサンドイッチにしていながらいるのです。

校長先生が舞台上に上がりました。ならばせ係のあみちゃん、クラスの先頭です。すぐそこに、校長先生の四角い顔が見えます。かい子も、かたの上から校長先生の顔をじつと見ています。

「みなさん、おはようございます。長い夏休みがおわりました。きようはまず、夏休みの反省をしてみます。勉強やお手伝いはたくさんできましたか？ 交通ルールを守って、安全にすごせましたか？」

校長先生のお話のはじまりです。休みのあいだにパワーをためこんだのか、声に力がこもっていました。

「さて、きようからは二学期です。いつまでも夏休み気分ではないけません。早く気持ちをきりかえて、けじめのある生活すること、いいですか」

ここでひといき入れて、体育館のなかをゆつくりと見わたしました。

「で、けさ、わたしは校門のところで立っていました。みなさんのあいさつを点検するためです。自分からすすんで

あいさつができた人はたったの十人。わたしがあいさつをしても、だまっていつてしまった人は二十五人もいました。これでは、あいさつは三十点です」

だんだん、声が大きくなってきました。校長先生のお話は、きょうも長くなりそうです。

(あーあ、また、おせっきようだ)

あみちゃんは、フウとためいきをもらいました。と、耳もとでつぶやく声が。

——つまらないもんもん……。

(あつ、この声)

あみちゃんが横目^{よこめ}で見たそのときです。かい子がピュツと白い糸をはきだしました。細い糸は、そのまま校長先生にむかつてとんでいつて、するするつと口のなかに入つてしまいました。

「うむ？ う。う。うーっ」

校長先生のようにがへんです。口がひらきません。まるで接着剤^{せっちゃくさい}でくつつけたように、くちびるがぴったりとあわさっています。

口がひらかなくてはしゃべれません。まだとちゅうでしたが、お話はおしまいです。校長先生は顔を赤らめて、ごすごとひきあげました。

(やったあ)

あみちゃんは、知らないうちにはくしゅをしていました。



すると、あつちからもこつちからも、はくしゆがきこえてきました。すぐに、体育館はくしゆでいっぱいになりました。校長先生のお話が早くおわって、みんなもううれしかったでしょう。

校長先生はてれながら小さく手をふって、みんなにこたえました。

学校からの帰り道、あみちゃんがひとりで歩いていると、えりちゃんが追いかけてきました。

「おお、きょうはまつ赤だ。わたしは、水玉とかチェックのほうがかわいいと思うんだけどなあ」

かたのかい子を見つけるなり、えりちゃんがいいました。えりちゃんの話は、本気なのかじょうだんなのか、よくわかりません。

「石原先生って、れんらくが多いから、やになっちゃう。きょうぐらい、一組といっしょにおわると思ったのに」

「二組じゃなくてよかった」

あみちゃんはい子に、ねーと首をかたむけました。一組の山田先生は、よぶんなれんらくはぜんぜんしません。そのかわり、だいじなれんらくもよくわすれますが。

「ねえ、来週から運動会のれんしゅうがはじまるんだって、知ってた？」

きかれたあみちゃんは、首を横にふりました。

「ことはダンスじゃなくて、しょうがいぶつりレーなんだって。れんしゅう時間がないからって、やめちゃうんだよ。わたしは、ダンスのほうがよかったな」

えりちゃんは、あみちゃんの知らないことをいっぱい話してくれました。これでは帰りの会がおそくなるはずです。運動公園のなかを近道しているときです。えりちゃんが、あみちゃんのＴシャツをひっぱりました。

「あのおばさん、きつととらずにいつっちゃうよ」

「えっ？」

いきなりいわれても、なんのことかわかりません。

「あれよ、あれあれ」

えりちゃんが指さした先に、大きな犬をつれたおばさんがいました。ちょうど犬がウンコをしているところでした。

「わたし、犬のウンコ、ふんづけたことがあるんだ」

「わたしもある」

「ゆるせないよねえ」

「うん、ぜったいにゆるせない」

えりちゃんとあみちゃんは、顔を見あわせてうなずきました。

思ったとおり、おばさんはそのまま歩きだしました。

「ちよつとまった！」

えりちゃんが追いかけます。あみちゃんもつづきます。

「おばさん、わすれものだよ」

ふりかえったおばさんに、えりちゃんがいいました。

「ウンコはちゃんともっていつてくさい」

あみちゃんもまけずにいました。

ところが、おばさんは知らん顔です。

「あぶないわよ。うちのボス、さんぼのじゃまをされるのがきらいだから、気をつけてね」

おばさんのことばをきいて、犬がウーッとうなりました。

ふたりは思わずからだをよせあいました。でも、こんなことでひきさがってなんかいられません。

「だれかがふんづけちゃったら、どうするんですか」

「ふんづけた人がかわいそうです」

「まあ、子どものくせに、おとなに意見するつもり」

おばさんと犬がにらみます。

あみちゃんたちにもにらみかえます。

「わかったわよ。このつきから、ふくろをもつてくるわよ。

それでいいんですよ。もう、近ごろの子はなまいきなんだから」

そういうすて、おばさんはくるりとむきをかえました。

「このつきからって……」

「じゃあ、きょうは……」

ふたりは、あいた口がふさがりません。ぼんやりと、お

ばさんの後ろすがたを見ていました。

すると、そのとき、あみちゃんの耳に、またあの声がか

こえてきました。

——ずるいじゃんじゃん……。――

かい子がピュッ、ピュッと白い糸をはきだしました。二本の細い糸は二つのウンコをかすめて、おばさんのくつのかかとにくつつきました。

なにも気づかず、おばさんがゴロゴロとウンコをひきずって歩いていきます。

「ねえねえ、いまのなに？　かい子ちゃんがやったんだよねえ」

目をまるくしたえりちゃんがせまってきました。

「なんだか秘密兵器ってかんじ。ほんとは宇宙人、じゃなくて、宇宙虫だったりして」

「さあ、本人にきいてみないと」

あみちゃんがいうと、かい子がちがうちがうと頭をふりました。

——カイコなんだからから……。――

そうつぶやきながら、かい子からだをおこして立ちました。そして、ゆっくりと頭をまわしながら、ピュッと糸をはきだしました。空にむかつてふん水のようにふきだした白い糸が、大きなわになっっておりてきます。

「わーっ、きれい」

あみちゃんが声をあげると、えりちゃんもわのなかに入ってきました。

「ほんとだ」

「きつと、まゆをつくるんだよ。カイコはまゆのなかで、おとなになるんだって」

「へーっ、じゃあ、わたしたちも、このなかでおとなになるのかなあ」

「なれるといいね」

「わたしたちだから、きつと、ものすごい美人^{びじん}になるな」
にっとうらうえりちゃんの横で、あみちゃんがほそっと

いいました。

「あきらくんと帰ってくればよかった」

日本児童文学 3・4月号 予告

〈特集〉14歳の風景

子どもから大人へ……、揺れる少年少女たちが
織りなす心の風景。その深層を探りつつ、児童
文学の側がどう受けとめていくかを考えます。

執筆者

村瀬 学・川島 誠・佐藤宗子
小倉 明・加藤純子・北村夕香
皿海達哉・芝田勝茂

●創作

大原興三郎・みおちづる

●詩

白根厚子・原田直友

※その他、「今この人に聞きたい」（森絵都
／聞き手・西山利佳）、私の創作ノート、
創作時評、同人誌評、新人登場、編集室
訪問など

（二〇〇一年三月九日発行予定）

話題の本

アイヌ語で語られた民話や故事来歴を、萱野茂が現代の日本語に直し、絵本のために書き上げました。神と人と自然のつながりを描く雄大な物語。

●各定価（本体1,400円＋税）

オキクルミのぼうけん

木ぼりのオオカミ

風の神とオキクルミ

斎藤博之／絵



アイヌの絵本



火の雨 氷の雨

いしくら きんじ／絵

竜の神カンナカムイの子と

アイヌたちの物語。

ある日、アイヌの里へ病気をまきちらす神が来た。

いしくら きんじ／絵

パヨカカムイ



口で歩く

丘 修三・作 立花尚之介・絵

定価（本体1,200円＋税）



タチバナさんは、ずっと寝たきりです。でも、ちっとも暗くありません。「すみませーん！ ほくといっしょに歩いてください」この一言で散歩をします。人は一人で生きているのではなく、ささえ、ささえられ生きているのです。

（小学中学年より）

